

「美術」と「アート」—美術館の昨今

近年、美術館をめぐる議論が盛んです。その背景には、国立美術館の独立行政法人化、公立美術館への指定管理者制度導入、一部美術館の経営難など様々な出来事があります。美術館は過渡期にあるともいえます。そのため、関係者間でも立場によって考え方が大きく異なる場合もありますが、それでも美術館に対する考え方は確実に変化しつつあります。

こうした議論では、美術館の運営や組織、資金面の問題が話題になりがちです。しかし、それだけではなく、「美術」に対する人々の意識、作家たちの活動や作品の在り方なども大きく変わりつつあることを忘れてはならないと思われまます。

最近、「美術」や「芸術」に代わって「アート」という言葉がよく使われます。このことは、「美術」をめぐる人々の意識や状況の変化を象徴していると思われまます。「アート」とは何か、「アート」と「美術」とはどう異なるのかと問われても、答えに窮してしまします。しかし、意味は曖昧でも、「アート」には「美術」とはどこか異なるもの、造形を「美術」とは異なる新しい視点からとらえたいというニュアンスがこめられています。そのため、「アート」という言葉が好んで使われるのではないのでしょうか。

このことは、NPOなどによる造形関係の活動が近年盛んになり、しかも学校教育や生涯学習だけではなく、地域活性化や福祉・医療とも関連した活動が人々に新鮮に感じられることと通じているようにも思われまます。

考えてみますと、美術館の活動は展示や教育活動の他、作品や資料の収集・保存など多岐に渡り、人目に触れない舞台裏の活動も少なくありません。多くの人々の眼に美術館と「美術」の世界はどこか得体が知れず、立ち入り難いところと写っていると考えるべきでしょう。美術館の存在意義、美術館にしかできないことを訴え続けていく地道な努力が求められていると思われまます。美術館の問題は、立地する地域社会の特性を抜きに議論を進めることはできません。三重という地域でどのような美術館が必要なのか、変化し続ける現実に関わされることなく、長期的な展望に立った議論を続けていきたいと思われまます。(Mi)

